

中央診療部門における医療環境評価軸の検討について

医療環境評価手法における医療機能・患者心理・環境構成要素の相互関連に関する研究

正会員○鮎川 武史³⁾
同 友清 貴和¹⁾
同 小滝 一正²⁾

1) 研究の背景・目的

医療を受ける患者から見た医療の質や適切さに対する関心の高まりや、客観的な情報に基づいて合理的な社会の運営を行うことを求めようとする時代の変化に伴い、平成7年7月に、財団法人日本医療機能評価機構の設立し、病院機能評価事業が開始された。これを境にわが国においても医療の質を第三者により評価していこうとする歩みが始まった。

そして医療機能の高度化や患者の高齢化に伴う多様化などによる医療概念の変化を背景として、新しい医療環境の設定や医療施設の機能類型化が進んでおり、こうした医療概念の変化に伴う新しい医療環境評価手法の確立が望まれている。

これまで各医療関係団体が提案・作成してきた病院機能評価マニュアルは、高度化した病院の診療機能から管理運営まで幅広い分野に及んでいる。

しかし、医療施設の環境面における評価についてはいまだ検討が十分でない状況にあり、医療を提供する立場と受ける立場、あるいは制度として運用する立場とその財政を支える立場などに応じた評価は不十分であるのが現状である。

そこで本論文では、医療環境評価手法の確立に向けて、その足がかりとして中央診療部門(検査部、放射線部)において現存の医療機能評価マニュアルの現状を病院建築計画の視点から分析し、それを元に医療環境評価における評価軸を分析し、検討することを目的とする。

2) 研究の方法

- (1) これまで提案されてきた12の病院機能評価マニュアル(後に示す)から病院建築の分野に関わる項目を抜き出す。
- (2) (1)で抜き出した評価項目から更に中央診療部門の検査部・放射線部に直接あるいは間接的に関連する評価項目を抜粋する。
- (3) (2)で得られた各項目によって評価される医療機能を確認し、医療機能に応じて必要性があると思われる医療環境面での評価要素を検討、抽出する。
- (4) (3)で得られた評価要素を評価性質に応じて類型し、患者心理軸・環境構成軸・建築分野軸等の医療環境評価軸として抽出し、その関連性を検討する。

3) 病院機能評価マニュアルについて

これまで提案されてきた病院機能評価マニュアルのなかから本研究で対象とした12の文献を下に示す。

これらの病院機能評価マニュアルには全部で1120項目の評価項目が示されている。

その項目のうち、建築分野に関わり、更に中央診療部門の検査部・放射線部に関連する評価項目を抽出したところ、165項目の評価項目が得られた。

165項目のなかで検査部・放射線部に直接関わる評価項目は56項目、間接的に関わる評価項目は109項目であった。

- (1) 病院機能評価検討委員会報告 日本医師会・病院機能評価検討委員会
- (2) 病院機能評価マニュアル 厚生省・日本医師会合同病院機能評価に関する研究会
- (3) 病院機能標準化マニュアル 日本病院会
- (4) 医療経営ハンドブック・同追補版 医療経営研究会(日本委託研究)
- (5) スタンダード Ver. 2 病院医療の質に関する研究会
- (6) 病院の管理機能の評価に関する調査 日本医師会病院委員会
- (7) 病院看護機能評価マニュアル(改訂) 日本看護協会
- (8) 民間病院の看護機能チェックマニュアル 東京都私立病院婦長部会
- (9) 老人専門病院機能評価表 老人の専門医療を考える会
- (10) 老人保険施設機能評価マニュアル 全国老人保険施設協会
- (11) 訪問審査調査[A](案) 財団法人 日本医療機能評価機構
- (12) 訪問審査調査[B](案) 財団法人 日本医療機能評価機構

4) 医療環境評価軸の抽出・検討

これまで提案されてきた病院機能評価マニュアルの多くは、主に医療機能を評価軸として作成されている。勿論、他部門との連携などを考えた病院全体の機能の評価は重要である。しかし先に述べたように第三者評価による評価視点の広がりから、医療機能をとる様々な医療環境の評価と、その評価軸の検討が求められる。

医療環境評価軸の検討をするにあたって、検査部・放射線部における現存の病院機能評価項目から考えられる医療環境評価要素を模索し、医療環境評価軸として抽出し、その関連性を考察した。本稿では、その分析の一例を【図1】、【図2】に示す。

【図1】は生理検査部の超音波検査室における評価項目の分析の例である。この項目からは、(1)医療設備の充実からくる安心感。緊急時に検査を受けることが出来る安心感。外来から一人で検査室にくる場合の戸惑いや不安。などの患者心理。(2)病院の規模による超音波検査室の有無。検査作業に支障をきたさないための十分な広さ。患者や職員の動線を考慮した、内視鏡検査室あるいはX線診断室とまとめた配置計画。戸惑いをなくした

The examination about valuation axis of medical care environment in Center medical treatment section.

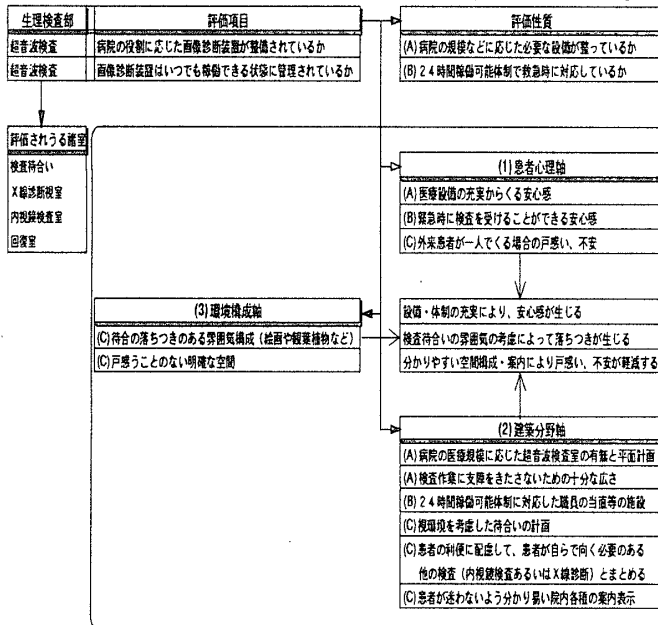
The study on mutual connection of medical care function, patient psychology and environment construction element in medical care environment evaluation technique.

Takeshi Ayukawa and Takakazu Tomokiyo

めの案内表示の作成。などの建築計画。(3) 絵画や観葉植物などを用いた待合いの落ちつきのある雰囲気構成。などの環境構成の要素が挙げられ、それらが関連性を持つことが分かる。

【図2】は放射線部門廊下における評価項目の分析の例である。この項目からは、(1) 職員の会話が聞こえてくることによる不快感。放射線被爆の危険性からの不安。動線分離により患者と医師の接点が薄くなることからの不安や戸惑い。などの患者心理。(2) 被爆の危険性を考慮した動線の分離。移動上の混乱を避けるための案内表示の設置。作業効率を向上や患者の不安を取り除くという意味での患者と技師の接点の提供。などの建築計画。(3) 複雑な動線に戸惑うことのない明確さ。雑音のない落ちついた移動・待機のための環境。といった環境構成の要素が挙げられた。そしてこの項目においてもそれらが関連性を持つことが分かる。また、病院における一般廊下を評価するための項目を見ても、採光・照明・視環境・温度などの環境構成要素。患者の症状や年齢に対応した安全対策や、火災時の消防設備などの建築計画などの要素が挙げられる。廊下は単なる目的地への移動のためだけの通路ではなく、その環境の充実性が問われていることが認識される。

このような分析の結果、安心感・不安感・快適感・不快感・羞恥心・落ちつきなどの患者心理。室やスペースの広さと配置計画(動線)、設備や機器の有無などの病院設計計画。採光や悪臭・騒音・視環境などの環境構成要素が医療環境評価軸の要素となる可能性が見いだされた。



【図1】超音波検査室の評価項目について

そしてそれらの要素は医療機能と密接に関係し、医療環境向上のために相互補完の関係にあることが明らかになった。

また、病院の医療機能はそれぞれの部門の適切な運営と部門間の円滑な医療連携から構成されている。したがって医療環境評価軸の確立に向けて他部門連携を考慮して、慎重に評価軸の検討を行っていく必要がある。

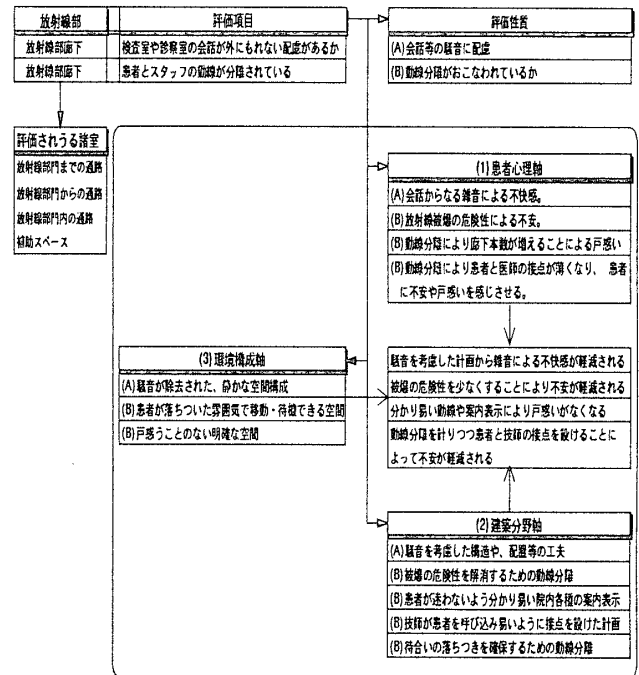
本稿では検査部・放射線部の医療機能評価項目を中心に分析し、医療環境評価要素(軸)を検討したが、更に診療部門や病棟部門などの他部門との関連を踏まえて評価軸を確立していく必要があると思われる。

5) まとめ

本稿では、医療環境評価手法の確立に向けて、中央診療部門(検査部、放射線部)において、現存の医療機能評価マニュアルの現状を病院建築計画の視点から分析し、それを元に医療環境評価における評価軸を検討した。

その結果、安心感・不安感・快適感・不快感・羞恥心・落ちつきなどの患者心理。室やスペースの広さと配置計画(動線)、設備や機器の有無などの病院設計計画。採光視環境・騒音や臭気などの環境構成要素が医療環境評価の要素(評価軸)となる可能性が見いだされた。そしてそれらの要素は医療機能と密接に関係し、医療環境向上のために相互補完の関係にあることが明らかになった。

今後の課題としては、評価者の立場によって医療環境に求める意味が異なり、場合によっては対立することを踏まえながら評価軸の検討をすすめていくことが挙げられる。



【図2】放射線部門廊下での評価項目について

※本研究は平成9年度科学研究費補助金・基盤研究B(1)課題番号09450225(研究代表者:小滝一正)の助成によるものである。

- 1)鹿児島大学教授・工博
- 2)横浜国立大学教授・工博
- 3)鹿児島大学大学院

- Prof.,Dept.of Architecture, Faculty of Engineering Kagoshima Univ, Dr Eng.
- Prof.,Dept.of Architecture and Building Science, Faculty of Engineering Yokohama National Univ, Dr Eng.
- Graduate School, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering Kagoshima Univ.